

図書館だより

’85.11

美しいものへの感動を大切に……

小野 百合（音楽）

目次	
美しいものへの	
感動を大切に……	
小野 百合……	1
資料紹介……	2～3
図書館をあなたのものに	
大型別置資料紹介	
鈴木 智子他……	4～8
ぶらうじんぐる～む	
私の図書館活用法	
滝田美由紀……	9
海外記	
パチカン市園	
近野 宣……	10～11
NEWS……	12

思い出の中によみがえってくる音楽は、いろいろありますが、幼い日におぼえた片言の歌、母と共に、あるいはお友だちと共にうたったなつかしい歌もたくさんあります。

色の音符で「もういいかい」「まあだだよ」とかくれんぼしながら歌い、そして弾き、色が音になったらよろこび、これもこどものなつかしい思い出の一つになることでしょう。

ドイツのマイノルフ・ノイホイザーも色の音符をつかっていて、色のついた一つの音符を、“魔法の棒。”とっています。色が音に、そしてメロディーになるのは、こどもたちにはうれしくてならないのです。この魔法のメロディーに先生は、色々の楽器で伴奏し、あるいは、先生のメロディーにこどもが伴奏し、たのしい時間をすごします。リズムだけのあそびには“魔法の棒。”はいりません。

4才になったばかりのこどもが、「メリーさんのひつじ」「きらきら星」が弾けるようになったので大よろこびでくりかえし、大きな声で歌いながら弾いております。

遊びながら学び、学びながら遊べる“いろおんぶ法。”による勉強は、こどもをいつのまにか音楽によって音楽に導き、音楽の夢がはぐくまれます。これに加えてレッスンのときの礼儀正しさ、色のまり、色の輪など教具を仲よく使う思いやりは、先生とこどもとの心をも結び、より豊かに生きる暖かい心の人をつくることでしょう。

こどもたちの身近な生活経験を生かし、音楽しながら基礎が身

につくよう私は、リトミックも共にしております。

先生は、教えることを系統たてて考え、こどもをよく知り、適当な時期に自然に黒い音符に移行していくような配慮が必要です。

“美しい花を見て心が少しでもなごみ、きれいな花を愛する心が人を愛し、自分を愛する心ともなる。”と読んだことがあります。私も同感で、音楽においても同じことが言えると思っています。

美しい音楽を聞いて感動し、また共に合奏して感動し、感じあう数々の経験は、豊かな心をはぐくみ、人と人の心をつなぎつけ、いたわる心を育てる貴重な経験となると思います。

音楽というすばらしい“宝物”をこどもたち

に伝えるため、教えるもの自身もこどもと共に勉強し、心の成長のための師でもありたいと思います。学生たちと勉強してまいりました。

私が舞踊をし、数学が好きになったのは、みな先生方の影響で、教える者の責任の大きいことを、自分の経験から深く感じ、それを学生に伝えております。

家族ぐるみで信仰をいただいたことは、藤学園で学ばせていただきましたおかげで、それに加えて母校で働かせていただけますことも心から感謝いたし、幸せなことと思っています。

「言葉だけでなく、強い意志で実行いたしましょう。」とおっしゃられたクサベラ先生のお言葉が、藤の校訓とともに私の心に生きております。

資料紹介

吉田 満 — 戦艦大和以後

大和は、当時（今も）世界最大の戦艦で、日本の敗色濃い昭和20年4月、第2艦隊10隻の旗艦として沖縄に出撃、延千数百の米軍機と激戦主砲弾自爆により、7日14時23分沈没した。

戦艦大和ノ最期は、乗組士官の吉田満が、戦後ほぼ1日で、作戦の開始から全戦闘、大和沈没から生還までを書き上げた記録で、戦争文学の傑作と称される。戦闘のみでなく、将校や兵の、青年と壮者の、言動を伝え生死を語る。この事実の重みや正確な描写は、簡潔な文語体に哀しい美しさを加え、感動を呼ぶ。

著者は、22才の青年が一気に書いた戦いの書には、戦後を如何に生きるかを欠き、明らかな限界がある、と自ら認め、人間—戦争により個人の意志と無関係に、その命運すべてが左右される—を書いた。白淵大尉の場合（季刊藝術）祖国と敵国の間（同）である。悲劇の象徴するものを直感した若い生命を通し、戦争を見直す試みである。この2篇は、公式記録によって増

補修正された戦艦大和ノ最期決定稿とともに、鎮魂戦艦大和に収められ、その主題を強める。

この戦争と人間性の悲劇を、若者ではなく円熟老成した人生の中に見たのが、提督伊藤整一の生涯で、この筆はあたたかく視線はねんごろで、伊藤整一は黙して立っている。

戦後たまたま戦艦大和ノ最期の草稿が、カトリック神父の手にわたり、不思議なめぐりあいを経て、吉田満はキリスト教の信仰を得るが、その経過と回心は、死・愛・信仰（新潮）また島尾敏雄との対談、特攻体験と戦後に詳しい。海の戦士たちの生死の極み、迫りくる不安、大和の体験は、キリスト教の信仰と重なり、自己との関わりや生活により、人間を問い詰める。それが生き残ったものの義務、著者はそう考え、そのように生きる。激戦で燃え尽きた者の余生ではなく、戦いに洗われた者の新生であった。若い感動は、次の短歌が謳う。

この日はよみがへりたまふこの日われ
主のみのちによみがへるべし
わがすでにわれにはあらずわがうちに
生れ出でましぬあらたなるもの

戦争に生き残ったものが、今のこの安気な時代に飽食して、盛りの花を愛でて、挽歌をうたうべきではない。彼らの死の光景、心情を、得得と語ることは許されない。この言葉には、誠実・純粋なキリスト者と評された著者が、あの大和の日を、心に熱く肩に重く生きた証しの響きがある。彼は大和の日に、涙をうかべて「もし一再び生きられることがあったら、平凡な生活の中で、隣人と仲よくしよう。親しい人たちを心から愛そう」そういうことこそ、ほんとうに大切なことと、海中をさまよい頭部の重傷に耐えつゝ、生死の間で考えていたという。

戦中派の死生観や散華の世代からには、東北の風土や生活を眺め、身辺を語りつゝ、しかし自分は何であるか、何をするのかを繰返した繰返す。大和の激戦で人間の極みを識り、その貴さも弱さも感じ、いまキリストの愛に生きる自分とは何であるかを、誠実に問い答える。

日銀幹部として2年のニューヨーク在動中、赴任の機中から始めて、毎日家族に書き送った773通の絵ハガキのぬくもりも、その心情の現れであろう。

吉田満は5年前、ふれあったK神父は3年前に帰天した。いま吉田満の信仰・告白を示す証言の集録は平和への巡礼である。表紙のマクデブルク教会戦没者記念碑は、人間の痛み、負い続けた痛みのしるし。同時に希望と平安の偲であり、永生を願う戦中派の姿でもある。

この夏、九州南西の海底に大和が発見され、艦首の菊花章がTVや新聞で報ぜられた。

一眼の前に生きている人間のように、生き生きと蘇った。蘇った死者は、賞讃も慰藉も必要としない。われわれは、ただ沈黙するほかはない。遺稿観桜会(季刊藝術)より

※ 引用した図書、雑誌は、すべて図書館所蔵です。

購入希望図書リスト

- 鏡のなかの鏡—迷宮 ミヒヤエル・エンデ著
岩波書店 1985 (943-E59)
- 病院のスケッチ E. M. オルコット著 篠崎書林
1985 (A933.4-A41)
- 教師 三浦朱門著 集英社 1985
(913.6-Mi87)
- ルイズ・ブルックスと「ルル」 大岡昇平著
中央公論社 1984 (778-B760)
- 葉のふるえ アリス・ウォーカー著 集英社
1985 (A933.5-W36)
- 21世紀は警告する 全6巻 NHK取材班著
日本放送出版協会 1985 (304-N71)
- 寺山修司の戯曲 全4巻 寺山修司著 思潮社
1983~84 (912.6-Te67)
- ニュルンベルグ裁判 ウェルナー・マザー著
TBSブリタニカ 1980 (329-Ma64)
- 私一人 ローレン・マコール著 文芸春秋 1985
(778-B13)
- 昭和作家論集成 磯田光一著 新潮社 1985
(910.26-I85)
- 平安末期物語研究史 寝覚編・浜松編 鈴木弘道
編著 大学堂書店 1974 (913.3-Su96)
- 御岳巡礼 青木 保著 筑摩書房 1985
(385-A53)
- 世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド
村上春樹著 新潮社 1985 (913.6-Mu43)
- まるで異星人 中野 収著 有斐閣 1985
(361-N39)
- テニスボーイの憂鬱 村上 龍著 集英社 1985
(913.6-Mu43)
- ゲーデル・エッシャー・バッハ ダグラス・R・
ホフスタッター著 白揚社 1985 (441.5-H81)
- アール・デコ ベグリス・ヒリアー著 PARCO出
版局 1985 (702-H58)



図書館をあなたのものに

大型別置資料紹介

図書館には、閲覧室内に、画集や美術全集をまとめて置いてある大型本のコーナーがあります。また、書庫2層にも、和装本や巻物などといっしょに、普通の書架に入らない大型資料を別置しています。これらの大型本には、美しい写真や絵が収められたものがたくさんあり、見ているだけでも楽しめます。勉強の合間や、難しい本を読んで少し疲れたかな？という時に、ちょっと開いてご覧になってみてください。今回は、これらの大型資料の一部を先生方に紹介していただきました。

鈴木 智子(国語学)

平治物語絵巻 講談社

夏休みも近づいたある日、ふらりと図書館に出向いて、書棚の間を楽しみながら歩いていたら、「平治物語の絵巻物があるのを御存知ですか」と司書の方に声をかけられた。私はたびたび図書館に行くけれども、歩く範囲はたいいきままっているらしく、大型資料の並ぶ奥の方にこんなにすばらしいものがひそんでいることにそれまで気づかずにいた。

書庫の二層、北東の一隅に行くと、窓際の棚の上段に、「三条殿夜討巻」「信西巻」「六波羅行幸巻」と書いた細長いダンボールの箱が三つ並んでいる。卒業生が寄贈してくださったというこの高価な巻物を、さっそく借りて来て開けてみると、くちば色の平絹に包まれた黒塗りの箱が出て来た。ふたを開けると、絹に包まれて桐の箱が入っている。さらに開いてようやく、縮緬のあわせに包まれた巻物を手にした。ひとつひとつといねいに開いていきながら、くちば色の濃淡で整えられたしずい色彩の組み合わせを、美しいと思った。

添えられた解説書によると、平治物語の絵巻物は全部で五巻あったらしいが、オリジナルが現存するのは三巻だけで、「三条殿夜討巻」は現在ボストン美術館に、「信西巻」は岩崎家の静



嘉堂文庫に、「六波羅行幸巻」は東京国立博物館にそれぞれ保管されている。この大学の図書館にあるのは、それらと慎重に照合を重ねながら、数年がかりで刷り上げた、本物をよく伝えるというみごとな絵巻物である。

今、この中から「六波羅行幸巻」について、ごく一部分になるが紹介してみたい。この巻は世尊寺行俊卿の筆とも伝えられる美しい文字の詞書に始まる。

主上六波羅へ行幸なる 女房の姿をかりて
御かづらめし かさなりたる御衣をたてまつる……

信頼によって大内裏に幽閉状態にされた二条天皇が、清盛のはからいで六波羅に脱出なさる部分である。詞書は、美福門院も六波羅へ移られたこと、主上が六波羅邸においてになったことで多くの公卿・殿上人が六波羅に馳せ参じたこと、これを知った信頼がたいそう狼狽し憤ったことなど、四段にわたって平治の乱の重要な推移を記す。

平仮名の繊細な線と、漢字のどっしりした筆の運びと、ねり色の料紙の上を走る墨の色は、優美で重厚な世界を作り出す。が、それにもましてすばらしいのは、そこにひろがる八面の絵である。

最初の絵は、内侍所を担ぎ出そうとして阻止される場面である。温明殿の屋根が、落ち着い

た色で大きく描かれ、廂に唐櫃が置かれている。そばに狩衣姿の男が正清の朗等に胸ぐらを捕らえられ、押し倒されそうになりながらも負けずにあらがっている。もう一人の侍が横から弓の筈をつきつけている。すぐ下で、腹巻だけの侍が大またで階段を跳び降りながら一人の男を追っている。追われる方は落ちかかる烏帽子を押さえ、指貫の裾を取り、素足で衣の裾を翻して逃げる。画面は大きく斜めに切れて、紙面いっぱいには描かれた宮門を境に牛車検問の場面が変わるのであるが、屋根のこげ茶と黒、唐櫃の赤、簾の緑、狩衣のくちば色とそれを縁どる青、直垂の柑子色、わずかな色が巧みに配置されて、きれいな画面を作り出している。他の場面も同

様で、赤、黒、青、緑、茶などわずかな色が実によく生かされている。

また、どの画面にも必要最小限度のものしか描かれていない。風景なし、点景なし、人の立っている地面さえ描かれていない。それだけに、選びぬかれてそこに置かれたものの与える印象はきわだっている。内侍所持ち出しの場面にしても、人物はたった五人しか描かれていないが、その真に迫った表情と姿勢は画面全体に緊迫した空気をみなぎらせている。

物語では読み取れない生活の場面々々も一目瞭然と興味深い。学生の皆さん、一度この巻を手にとってごらんになりませんか。



三浦 房江 (被服学)

美しく装いたいと願うのは人間の根本欲求の一つであろう。服飾教育に関する技術と感覚専門教育にかかわる基礎教育から生活と衣服、被服と文化と発展に広がる。被服を学ぼうとする時、時代と共に変る衣生活に順応し、自らの衣生活をファッションナブルにできるよう生活感覚のゆたかさを求められる。感覚面では、より豊かな創造性の追求をし、個々の独創的なもの創りと、美意識の探求をする。被服構成では身体という生身の対象に対し、被服を作っていくプロセスは、まさにデザインで、生活、社会、その環境を無視して構築していくことは不可能である。この目的意識は芸術教育の中で最も重要な自己のイメージを具体化する教育は、創造性と表現性だけのことでなく、自己の性格、自己のイメージなど、さまざまな内的なものからとらえ、新しい創造行為に展開していくことである。服飾の美術、工芸、建築の実用芸術としての創造性を養い発展させるためにも参考となる資料をいくつか紹介したいと思う。また、見

るだけでも楽しく目の保養にもなると思う。

新しいデザインの技法 筒井茂雄著 教材社
デザインの理論と造形活動の実践的見つけ方によって、創造性を養う。全体が3部に構成されている。①材料からの技法の発展、②形と材料による構成、③色材、配色による表現技法。

新しいデザイン教育 筒井茂雄著 教材社
芸術の美と技術の美とが一つに結び合った新しい美がデザインである。何かを設計する場合その目的に対し、一番適切な処置をすることから発する。デザイン教育では「物をつくり出す」ことを通して創造的態度、能力を養うことが第一。理智的な思考と感性との統合によって計画的に物を創造していくところに価値をもつ。

アール・デコ装飾文様 I・II 学習研究社
1920年から1930年にかけてバリーでみられた装飾文様である。

I E. A. Séguy (セギー) 著 「Primavera」 (春)、「Floréal」 (花月)、「Suggestions」 (連想)、「Samarkande」 (サマルカンド)、「Papillons」 (蝶)の5冊を複製したもの。

II A. H. Thomas 著 「Formes et Couleurs」

(形と色彩)、E. Benedictus著「Variations」(変奏曲)、G. Darcy著「Or et Couleurs」(金と色彩)、M. P. Verneuil著「Kaléidoscope」(万華鏡)の4冊を複製したもの。全図版は原著通りの収録で色彩や形の奔放な感覚を養わせている。平面化された形の特徴、伝統的優雅さをみせる具象的な文様の流れと抽象的な文様の近代的傾向とがみられる。

ヨーロッパの装飾文様Ⅰ・Ⅱ I M. E. Grasset (グラッセ監修) II E. A. Ségué (セギー著) 学習研究社 自然と接してデザインされた図版によるもの。バリーの象徴の一つであるエッフェル塔に構造体の一部にある唐草模様の装飾文様と入れられている。

世界装飾図譜 第一輯(上・下)、第二輯(上・下) アルベール・ラジネ著 三一書房 原色図版によるもの。美術時代の歴史を通じいろいろ

の方法をみていく。装飾の構成はすべての要素の平衡と完全の調和から生まれる静止と満足の感情にあるといえる。

世界の染物 岡村吉右衛門著 衣生活研究会 日本人は染物とは切っても切れない生活をしている。若い女性の訪問着は元より、祭り衣裳、夏のゆかた、また普段着の小紋に至るまで図版、色彩に変化が多い。また更に織物の縞や縞などと他の調度品ともよく調和する。しかし、染物は日本だけの文化ではなく、世界各国でも、技法は研究され、民族独自の染物を身につけている。世界の染物の表題ではあるが、日本と中国、インド、インドネシアの経験による各地の、各時代、各技法などについて、やや専門的に書かれている。美的感覚、創造性へのアプローチするためにもこれらの資料に目をふれられることを願っている。



石井よう子(調理実習)

1. 日本料理大観 主婦の友社
2. 日本料理歳時大観 主婦の友社
3. 食卓の芸術 飯田深雪著 海竜社

1は日本料理の様式、名物、会席料理春夏、秋冬の4巻、2は饗12月(上)(下)、伝承12月、茶饗菓子12月、の4巻から成る。

いずれも前半はカラーページで日本の最高峰ともいべき料亭の料理、格式ある神社の神饌、宮中行事と料理、茶道家元の茶事等々が紹介されており、後半にその解説がある。これらのシリーズは料理の作り方の本ではなく、絵画を鑑賞するごとく見て楽しむ本であり、また日本の心を

学ぶ本である。日々の食生活がともすれば潤いを失いがちな状況の中で、忘れ去られた過去の伝統や料理の原点ともいべきものにふれることが出来、私達が潜在的に持っている文化的飢餓感を満たしてくれるものがある。

3はテーブルコーディネーションの本で、著者は洋風料理とアートフラワーの研究家としてよく知られている。日本人は概して自分の家の人を招くことが苦手であるが、家庭レベルでもてなし方が豊富な海外体験をふまえた独特のセンスで示されている。日頃マンネリになりがちな生活感覚をもっと素晴らしいものにしたいと思う時、新しい世界を見つける楽しさを教えてくれる本ともいえよう。

鬼丸 吉弘(美学)

シャガールの聖書 ビニール・プロヴォワユール解説 岩波書店

幼い頃から聖書の虜であったと言い、聖書をもって詩想の最大の源泉だったとするシャガールの、聖書を主題とした油彩・水彩・版画・ステンドグラス等々を集めたもの。

どの場合も絵と聖書の文章が対照されており、別に詳しい解説がつけられている。印刷が鮮明で、シャガール特有の明るい華やかな色感がよく出ている。

画集 レンブラント聖書 旧約篇・新約篇

2巻 ヒド・フックストラ編著 学習研究者

聖書を題材としたレンブラントのおびただしい宗教画を編集したもの。左頁に該当する聖書の文章を掲げ、右に絵を載せている。その下に編者の解説をつけるが、行き届いた内容をもって、学術的水準も高い。聖書の理解にも、レンブラントの美術を鑑賞するためにも有益な書物である。

エジプトの秘宝 杉 勇編 全5巻 講談社

古代エジプトの美術を、建築・彫刻・絵画・工芸等のあらゆる分野にわたって、鮮やかなカラー写真で紹介している。それぞれの図版に詳細な解説がつけられているほか、別に美術の背景となっている古代エジプトの、歴史・日常生活・宗教等についても、それぞれの専門家の手で、多数の参考図を交えて詳しい説明がなされている。

世界の博物館 加藤秀俊編 23巻 講談社

世界中の最も重要な博物館について、それぞれの特徴と、主要な所蔵品の解説を行なっている。ルーブル、エルミタージュなど、美術館的

傾向の強いものも多少含むが、主に生活用具や科学・人類学関係のコレクションをもつ博物館が、多数の図版と共に紹介されている。

世界の巨匠シリーズ 全50巻 別巻5巻

美術出版 一冊 合巻

ヨーロッパの美術史上、著名な作家を取り上げて、一人ずつ詳しく説明したもの。作家ごとにまとまった伝記と評論がなされているほか、作表作品多数をカラーで示し、詳しい解説がつけられている。また別巻として、〈印象派〉・〈現代美術の歴史〉・〈シュールレアリスム〉等の、流派や時代による通史も続刊中である。

アジアの彫刻 小川晴暲撮影・小川光暲解説

1巻 読売新聞社

古美術の撮影で有名だった小川晴暲氏による、インド・東南アジア・中国・韓国・日本の彫刻の写真を集めたもの。順次に見て行くと、仏教美術の東漸と、そのわが国での発展の過程が、おのずから理解される様になっている。解説もその様な見地からなされてわかりやすい。

奈良六大寺大観 太田博太郎他編 13巻

岩波書店

法隆寺・薬師寺・興福寺・東大寺・唐招提寺・西大寺について、その歴史と建築、及び所蔵の彫刻・工芸・絵画等について、豊富な図版と共に多数の専門家による詳細な解説と論評を加えたもの。今日この方面での最高の学術的水準を示すもの。

大和古寺大観 太田博太郎他編 6巻

岩波書店

中宮寺・当麻寺・秋篠寺・室生寺等、上記の〈奈良六大寺大観〉に洩れた20の古寺について、さきのシリーズに倣って編集された詳細な

写真集と解説。

最後に紹介していただきました大和古寺大観は、予算の関係上、現在のところは所蔵しておりません。(係)



落合 健一(哲学)

大型の書物を見る(大型本だといふ私は「読む」と言わないで「見る」という)ことは実に楽しい事である。最近藤の図書館にも大型本が増えてきた。それについて、特にラファエルについて書いてほしいと図書館の係より頼まれたが、まず、私が昔実に楽しく大型本を「見」てそして「読」んだことを話そうと思う。

戦争直前のことだが旧制高校生だった頃、図書館に矢代幸雄氏(世界的な美術評論家)の英文で書いた“Sandro Botticelli”(8年前に日本語訳が中型一冊本で出された)という大型本のあるのを見つけだした。当時大型本は稀だった。館外貸出禁止になっているこの書物の貸出しをおそろおそろ願ひ出ると、重くて部厚い三冊本が奥から運ばれて来た。一冊は本文、二冊は画集である。発行地はLondonでまずその装丁がすばらしい。表紙も裏表紙も真っ白な羊皮紙で包まれていて別につまらぬ装飾はない。清らかでノーブルでしっとりしている。裏書を見ると印刷部数200部のうち百何番という登録番号が書いてある。画集の方は色刷りではなく全部白黒だが上質の紙に(日本紙かもしれない)おちついた墨色で、なにしろ大きな画面だから細かなところもよくわかる。

この時から半年以上におわたっただろう、週に3日か4日、放課後から夕食の時間まで2時間位この書に親しむことができた。図書館では毎日のように私が借りに行くものだから、どうぞこちらへと別室に案内された。広い机が3つ4つと椅子が幾つか、今は何にも使っていない部屋なので私の専用にしてくれ、書物もそこに置き放しになった。図書館員も重い書物を毎日出入れするのは大変だっただろう。

その部屋でたった一人で、まだ切っていない大

型本のページをペーパーナイフで切りながら、画集の方をそばに広げてあちらこちらめくっては参照しながら、ゆっくりと読み進めていった楽しみはいつまでも忘れられないことである。英語の文字は大きな文字で大きなページにゆったりと書かれている。日本人が書いた英語だからオーソドックスで、ひねくれた構文は一切無く、私には分かりやすい名文である。

矢代さんは時々日本の歌麿の浮世絵を引き合いに出しながらポツィチェリの重要な特徴である象徴性に注目しながら説き進んで行く。私は研究社の大英和辞典を引きながら要点をノートにとっていった。そのノートはその後残念ながらなくなってしまった。その時の英和辞典には引いた単語の下に鉛筆で横線を引いた跡が今も残っている。

大型本を見るには先ず落着いた気持ちが必要である。長時間(数時間から場合によっては数日)かかることを最初から予定し、スペースのゆったりした机まで本を持って来る。書庫の中、大型本のある傍にかなり広い机が置いてあれば一番良いのだが、ここの図書館ではその余裕がないのが残念である。自分はその書物にとりつかれてしまった気持ちになる。例えばラファエル画集の解説書をひろげる。光の微妙な輝きなのが説かれている。この絵の見所はここにあるのだなと思って改めて絵の方をゆっくり見る。ラファエルには他の多くの画家の影響が見られる。悪くいえば物真似がうまく、良くいえば包容力がある。ダヴィンチやミケランジェロ等の良いところをとりいれ、完全に自分のものに消化している。ではという訳でダヴィンチの画集を持ちだして並べて見る。こんなことをしていると幾ら時間が有っても足りはしない。一生かかっても良い仕事だろう。

ぶらうじんぐる〜む

私の図書館活用法

滝田美由紀

(文学部国文学科3年)

しばらく親元を離れて暮らしていると、送られてくる仕送りを計画的に使うといういわば主婦的の金銭感覚が身についてくる。1ヶ月の生活費を、生活に必要な項目ごとに適宜割ふっておく。これに慣れすぎてしまうと、何か買い物をしたときでも今〇円使ったからあとは〇円残って、〇日をこの〇円で生活していいといった計算が瞬時に頭の中を駆けめぐるので困ったものだ。当然予想外の出費がかさむと、一番削りたくない本代からも費用を割愛しなければならなくなる事態が時々起こる。こんな理由で、今迄何冊の欲しい本を手にすることができなかったか。いや、本が買えない理由はもう1つある。私が読みたいと思う本はほとんど高値のハードカバー本で刊行されているということだ。出版物氾濫の御時世とはいえ、千円札1枚でおつりのくるハードカバー本なんてお目にかかれるものではない。そのくせ何年かたてば、そのハードカバー本も、格段安い文庫本に变身して店頭にのこのこ再出現するのだから、こうなったらもう興ざめである。なぜ出版社は、ハードカバー本と文庫本を同時に出版しないのか。始

めから2つの形態でだすつもりなら、どちらを買うかの選択権くらい読者に残しておいてもらいたいものである。2種類一緒に刊行してくれれば、大見栄切ってハードカバー本を購入する余裕のある人はそれでよし、そうではない生活費の振り分けに頭を悩ませる私のごとき学生は安い文庫本を買えばいいのである。

読者はまず読んでみて、その本がハードカバー本の高い価格に値するだけの優れた中身を持っていたら迷わず購入するだろうし、そうでなければいっそ買わないか、文庫本ですませるはずである。

かくして私はハードカバー本が文庫本に変わるまでひたすら耐えるのであるが、その待っている間に買えなかった本への欲求不満を幾分和らげてくれるのが本を貸してくれる施設—図書館である。貸出—週間の制限と他人の手垢を我慢すれば、ハードカバーだろうがなんだろうが著名な新刊書だって「無料」で読める。本が買えるまでじっと待つだけの自分にとってタダ読みができる図書館は実にありがたい場所なのである。



図書館に備えてほしい本があるときは…

“せっかく張りきって図書館に来たのに、読みたい本が無くてがっかりだ”という経験はありませんか？こんな時はあきらめないで。図書館では、皆さんが必要な資料をできるだけ収集し、利用できるように努力しています。備えてほしい図書等がありましたら、

カウンターの前に用意してあります購入希望図書申込用紙に、書名、著者名、出版年、出版社、価格等を詳しく記入して申し込んでください。出版社カタログや、書籍目録等も用意してありますのでご利用ください。希望の本が購入されなかった場合、また急いでいる時には、他の図書館から借りることもできます。係までお気軽にお申し込みください。

海外記

バチカン市国

近野 宣 (宗教学)

テレベレ河にかかる美しい橋、聖天使橋を渡って、有名な聖天使城(歌劇トスカ第三幕の舞台)から、ヴィア・デラ・コンチリアツイオーネ(和解通り)と呼ばれる堂々たる大路をゆったりとのぼりつめた正面に聖ペトロ大聖堂がせまってくる。この聖堂の左右から前方を取りかこむように大理石柱の回廊がめぐらされて大聖堂広場となっているのだが、回廊両端から半円形にはば50cmほどの白線が石だたみの上にひかれている。和解通りの終点でもあるこの白線は、ローマ市との境界、つまりイタリア国との国境線なのである。白線の内側はもちろん「バチカン市国」。多くは知らずに越えて大聖堂へと急ぐのだが、私は訪問のたびに踏みしめて渡ることになっている。全世界の精神的指導者、現代では特に「平和の使者」、我々のパパ(Pope)ローマ教皇(カトリック教会の呼び方、一般には法王)のおくちに入ることになるからである。(パスポートは必要ない。もっともバチカン市国の正式の入口では別であるが、一般人は入国できないので気づかいはない。)もともとローマ皇帝ネロの庭園と競馬場があったところ、69年頃、聖ペトロがここで殉教して競馬場附近の共同墓地に埋葬されたのだが、コンスタンチヌス帝が324年から349年までかけて完成したのが聖堂のそもそもである。現在のものは、教皇ユリウス二世がルネッサンスの芸術、経済を駆使して着手、ブラマンテ、ラファエロ、サンガロ、ミケランジェロ、マデルノと監督を変えながら、1626年教皇ウルバヌス八世によって献堂式のはこびとなったのである。地下は聖ペト

ロおよび歴代教皇の墓所となっている。大聖堂を中心として、教皇宮殿、博物館、図書館、古文書庫、天文台、政庁部、民舎、銀行、市民市場、発電所、印刷所、機械工場、停車場、放送局、兵舎、各国大大使館などを有する面積44万平方メートル、市国民2000人、市国居住者1000人の世界最小で、ごく最近の独立国(1929年ラテラノ条約によってイタリア政府と協定)がバチカン市国(Stato della Città del Vaticano.SCVと略)である。主権者はローマ教皇、彼は同時に7億5000万カトリック信徒の首長であり、むしろその意義が重要なのである。統治する中央機関がローマ教皇庁(Roman Curia)と呼ばれ、教皇と教皇庁を一つにして教皇座(Sedes Apostolica—使徒座、Holy See)という。バチカンの名は、Vaticus ヴァティクス、又はMons Vaticanus、ヴァティ



カンの丘という地名に由来するが、市国のみを指す場合と、教皇庁そのものを意味する場合があるが、現在国際的には、バチカン市国の名称は用いず、「教皇座」が用いられている。小粒ながら、立法、司法、行政府を持ち、各国と

の外交関係は列国のみ、個々の貨幣、切手を発行、通貨はイタリアと等価のリラ、折々に聖堂広場に郵便局が特設され記念切手等容易に手に入る。すべてSCVが入っている。市国民は、

直接間接に教皇に仕える官吏、奉仕者、特にローマ在住の教皇側近の枢機卿（教皇に次ぐ高位聖職者一例えば國務長官など各省長官）は出身国にかかわらずバチカン市国民となり、その資格で行動する。その他職務上認められたものとその家族などがある。役職を離れたり、ローマ在住をやめたりするとき、それぞれ出身国籍にもどる。同時に教皇旗（天皇旗のように）でもあるバチカン国旗（黄と白、教皇冠と槍）を有し、イタリア貴族80名より成る貴族近衛兵、スイス人青年100名のスイス衛兵（ミケランジェロ作の服装は有名）が、教皇身近の護衛および、市国入口、扉の守備にあたっている。（司祭服で行くと敬礼されて良い気分になる…）ローマ教皇（Romanus Pontifex, Pontifexは橋渡しをするもの一天上と地上、近代諸教皇では、諸国民、諸国家、諸宗教の間のPontifexとしての活躍は目ざましい一意）は、「ババ」（ギリシャ語の

パパス、ラテン語のババ、父の意。聖職者一般のPater, Father父の呼称と特に区別してPapa、略してPP）と呼ばれて親しまれているが、同時に「僕たちの僕（Servus Servorum）」とも称する。現教皇ヨハネス・パウルス二世（Johannes Paulus PP II）とサインされる）は、聖ペトロ以来265代目、ポーランド南部の小さな町ワドビッチ出身、幼児洗礼を受けられた小さな教会と路地ひとつのアパートの二階が生家、とてもかわいらしい建物である。（札幌教区司祭近野巨、と日本語で記帳してきた。いつか教皇がごらんになるかもしれない？）東西問題の接点に立ち、南北の差のまさにPontifexとして日夜、御苦心され

ている。1978年登位以来、ほとんど毎年、時には年に二度、「平和をつくるもの」として、全世界を訪れている。1981年3月22日-26日の訪日の記憶はまだ新しい。

ところで、一般旅行者が触れうるのは、バチカン市国のほんの一部、大聖堂と美術館ぐらいである。といってもゆっくり見るなら相当の時間を要する。大聖堂に入ったひとは、おそらくその大きさを実感できないと思う。すべてが大きく、調和がとれているからである。歩きながら、人間と細部を比較してみて、はじめて大きさに圧倒される。中央内陣の床に世界各地の大教会の寸法が示してあることから大きさがわかる。ミケランジェロのピエタ像、十字架の礼拝



堂、秘蹟の礼拝堂、中央祭壇、聖ペトロの銅像、地下の聖ペテロの墓などを見て、余力のある人は、クブローネ（大きな円屋根）と呼ばれるドームにのぼってローマ全市を眺望する。大聖堂を正面に見て広場から右手にレオニヌの城壁と呼ばれる巨大な城壁が続き、やがてバチカン美術館の門がくる。美術館そのものには、エレベーターが美しいらせん階段で入るのだが、ギリ

シャ・ローマ文化以来の歴史が秘められているとよい。しかしなんといいても、ルネッサンスの粋が集められている。教皇ニコラウス五世以来9代にわたる、いわゆる「ルネッサンス教皇たち」の中には悪名高いものもいたが、彼らの保護なしにルネッサンスの開花はない。それまで異教徒のものとして排されていた古代の哲学や文学の再発見につとめたヒューマニスト教皇たちの業績も、ローマカトリック教会の政策のひとつであったことは歴史の語るところである。こうして「ラファエロの部屋」や「システリーナ礼拝堂」がわれわれに残されてきたのである。

NEWS

洋書目録が変わりました

図書館では洋書の目録を現在のカード形式から冊子体に変更することを計画、今秋より作業に入りました。そのため当分の間は下記のような態勢で、洋書の情報をお知らせすることになります。

- **カード目録** 冊子目録完成までは昭和59年度（昭和60年3月末）までに受入れた図書の日録として、従来どおりお使いください。
- **新着資料案内 洋書編** 昭和60年度（昭和60年4月）以降に受入れた図書で、利用可能となったものをお知らせします。原則として毎週1回（除、各月最終週）発行します。
- **増加目録 洋書編** 新着資料案内を編集しなおして、毎月末に発行します。分類目録、人名・団体名目録、書名目録の3種類があり、受入れ年度毎に毎月累積されます。つまり、洋書を探す場合はカード目録だけではなく、新着資料目録と増加目録を併用しなければなりません。しばらくはご不便をおかけすることと思いますが、よろしくお願い致します。

冬休みの予定

例年どおり、12月16日から1月14日までは休日開館となります。この間に年末年始の休館が2週間あり、次のとおりになります。

開館（9時30分～16時）

12月16日～12月23日

1月7日～1月14日

休館

12月24日～1月6日

なお、詳しくは掲示板でお知らせします。



資料移動

夏季休館中および大学祭休館中に、下記の資料の配置場所が変更になりました。

和雑誌44タイトル、洋雑誌41タイトル：

書庫3層→学外資料室（これまで該当資料があった場所に、案内板が出ています。）

洋書000-120、140-180：

書庫1層→学内資料室

※これらの資料を利用なさる方は、貸出カウンターにお申し込みください。

なお、和書1門、6門も、書庫1層内で多少移動いたしました。

寄贈のお知らせ

本学の旧教員、丹貞一先生が多くの家政学・栄養学関係の図書と雑誌とをご寄贈下さいました。学生の皆さん、研究・レポート等におおいにご利用下さい。

☆お詫びと訂正

本誌21号に誤りがありましたのでお詫びするとともに下記のように訂正いたします。

p 行 (誤) (正)

1 32 ナンデュット→ナンダコット

1 37 シュライマッヒャー

→シュライエルマッヒャー

4左33 resarch→research

6右9 文学者→文学者

9左24 松尾蕪蕪→松尾芭蕉

12奥付 北区16条→北区北16条